

T Y K

TOKAIDO YOTSUYA KWAIDAN

東海道四谷怪談

大詰め

第一稿

原作／鶴屋南北

脚本／小中千昭

Animation Play by Chiaki J. Konaka

2005\07\12

登場人物

鶴屋南北

民谷伊右衛門……………浪人

民谷お岩……………四谷左門の娘／伊右衛門の妻

佐藤与茂七……………お袖の許嫁

秋山長兵衛……………伊右衛門の浪人仲間

在所（田舎）娘……………お岩の化身（衣装違い）

お熊……………伊右衛門の母

民谷源四郎……………伊右衛門の父

僧侶達

○イントロダクション

水墨で描かれたお岩の絵の数々——。

南 北「(モノ)私の名は四世鶴屋南北。私が書いた狂言『東海道四谷怪談』の物語も、いよいよ大詰めを迎える——」

○狩場／高円寺辺り

これは、夢だ。

伊右衛門が見ている、穏やかな日々の夢——。

黄金色の輝きに満ちた初夏の夕暮れ。

脚に金輪を嵌められた鷹が低空で飛び去っていく。

と——、伊右衛門が見回しながらやってくる。

はて、鷹は何処へいったか——。

と——、前方に、簾がかかった小さな田舎家が建っており、その前に在所(田舎)娘が立っていた。

伊右衛門「もし……。この辺りに鷹が飛んで来ませんでしたか」

在所娘「鷹なら、今ここに」

鷹は屋内にとまっていた。

在所娘「あなた様手飼いの鷹でしたら、どうぞお持ち帰り下さい」

伊右衛門「かたじけない。しかし——、こう暗くなってきたは、

道に迷ってしまうかもしれない」

在所娘「(くすくす)暗い事などありますか。(空を見て)あんなに大きな月。今宵は七夕ですわ」

伊右衛門「確かに……今宵は七夕か……」

在所娘「およろしければ、大したもてなしも出来ませんけれど、お寄りになりますか」

伊右衛門「——」

○在所娘の家内

質素な室内。室内には七夕竹が飾られている。

糸車が部屋隅に置かれ、その上に鷹がとまっている。座る伊右衛門の前に、鯖の乾物と杯。

酌をする在所娘。

伊右衛門、その手をとって引き寄せる。

在所娘「あっ……。立派なお侍様が、私の様な田舎娘に……」

伊右衛門「今は浪人。しかも——、独り身になっている」

在所娘「まあ、奥様は如何されたのです」

伊右衛門「——色々あって死別した。——お前は美しいな……」

在所娘「——（恥じらい）御冗談はおやめ下さいまし……。あの、

お名前をお聞きして宜しいですか……」

伊右衛門「民谷、伊右衛門……。して、そなたの名は」

在所娘、すっと伊右衛門の手から逃れて立つ。

在所娘「アイ、わたしの名は——」

と——、七夕竹から一枚の短冊がひらひらと落ちる。

伊右衛門、それを手にとり詠む。

伊右衛門「——瀬をはやみ 八岩Vにせかるる 滝がわの

われても末に 逢わんとぞ思う……」

○同／建物の外

浪人仲間であった秋山長兵衛がやってくる。

長兵衛「民谷——。どこにいるのだ。鷹は見つかったのか？」

と、長兵衛の目の前に突如現れる、ボロボロの廃屋。
しかし、その中から明かりが漏れていた。

長兵衛「はて……。こんな空き家に明かりとは……」

長兵衛、近づき、そっと隙間から中を覗く。

長兵衛「二（息を呑む）」

長兵衛POV

座っている伊右衛門。そして、その前に立っているのは——、骨と皮の肉体におぞましい顔の女。

長兵衛、口を抑え、後退していく。

○同／内

伊右衛門、既に恐ろしい事が起こる事を予期し始めている。

伊右衛門「——岩にせかるる……。 (在所娘に目を向け) そなたの、名は……？」

お岩「——岩でございます……」

伊右衛門「！」

そこにいるのは、確かに紛れもなく、お岩だった。醜い顔ではなく、美しかった時の——。

伊右衛門は杯を落とし、岩を見つめる。

伊右衛門「——岩……」

美しかった岩の顔、徐々に醜く変容していく。

お岩「(位相反転声) 恨めしいぞえ、伊右衛門どの……」

伊右衛門「！」

突如鷹が飛び立ち、伊右衛門に向かってくる。

鷹は虚空にて、大鼠に変容し、伊右衛門の顔に噛みつこうとする。咄嗟にそれを払う伊右衛門。

と！ 糸車が突如炎上。燃え盛ると共に大きくなっ
ていき——、地獄車となって伊右衛門に迫る。

伊右衛門「うわああああっ！」

お岩「(位相反転声) 共に地獄に落ちましょう。来れや民谷」

伊右衛門「わあああああっっっっ！！ わあああううぐぐくっ！！」

○蛇山庵室／仏間

はっと目を覚ます伊右衛門。

薄暗く、ただ白く囲まれた狭い空間——。

僧侶達の念仏が聞こえてくる。

僧侶の読経「(オフ／はつきり聞かせず) 願以此功德(がんいし

くどく) 平等一切 (びょうどういっさい) 発菩提

心(ほつぼだいしん) 南無阿弥陀ん仏 南無阿弥陀ん

仏」(以下繰り返し)

白い世界に向かって手を伸ばす伊右衛門——。

伊右衛門は、紙帳(紙製の蚊帳)の中に寝かされていた。それを破って這い出て来る伊右衛門。

母のお熊が心配そうに見ている。

お 熊「伊右衛門！ 大丈夫か？ しっかりしなされ！」
伊右衛門「母上……？」

見回す伊右衛門。そこは、蛇山（本所）にある寺の
一室（僧侶の私室）。
伊右衛門を取り囲む様に、数人の僧侶が念仏を唱え
ながら、大きな数珠の玉を送っている。

お 熊「せがれや……」

伊右衛門、座った目で虚空を睨む。

伊右衛門「くそ……。祟り殺されてたまるか……。南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏——」

念仏を唱えながら、伊右衛門、立ち上がる。

ごーん——ごーん——ごーん——

お 熊「はて、もう暮れ六の鐘。この刻になると伊右衛門は熱病
にうかされる……」

○同／門口

伊右衛門は門口に立って障子を開けた。

伊右衛門「——」

しんしんと降り積もる雪——。

脂汗を浮かべた伊右衛門は、じっと庭を見つめる。

伊右衛門「——（眩き）夢……。七夕の夢か……」

と、傍らに下がっている提灯に目を向ける伊右衛門。

その提灯の明かりがゆらゆらと揺らめき——

伊右衛門「……（意識蒙昧）」

提灯がお岩の顔に変容していく。

伊右衛門「——岩……」

現れたお岩、真っ赤に染まった赤子を抱いている。

伊右衛門「！——その子は……」

お岩、赤子を伊右衛門に差し出す。

伊右衛門「——俺が育ててやる！ だから！ だから成仏してく
れお岩！」

赤子を受け取る伊右衛門。

が、そのあまりの重さにギョツとなって見入る。

伊右衛門「うわっ！」

それは血濡れた石地蔵。

伊右衛門、それを放り出し——刀を抜いて岩に切りかかる。

伊右衛門「(半狂乱) くそおおお！ くそおおおお！ おっ、お梅と夫婦になったのは、吉良家縁の伊藤家に取り入って討ち入りの手引きをする為！ 俺は忠義の男だ！ お、お前と小平を殺させたのはお岩！ お前の崇りのせいじゃないかっ！ 俺は——、俺は悪くない！」

と！ その伊右衛門を背後から抑える男。

長兵衛「民谷！ しっかりしろ！」

伊右衛門「!?」

伊右衛門が目茶苦茶に切りつけていたのは、提灯であつた。

がつくりと力を抜く伊右衛門。

長兵衛、肩からかけた手拭いで顔を拭き——

長兵衛「——すっかりお主も崇られたな……」

伊右衛門「秋山、仕官の話だが……」

長兵衛「最早お前を宛にはしておらん」

とん——とん——とん。

ギョツとなる二人。その音はまるで——

▼フラッシュ／民谷家庭で、戸板にお岩と小平の死

骸を打ちつける長兵衛

長兵衛「……」

振り向くと、僧侶の一人が、壁の隅を釘で打ちつけていた。

僧 侶「鼠穴が開いておりましたので……」

安堵する二人。

長兵衛「もうお前と会うのはやめる事にする。それを言いに来た」

伊右衛門「——そうか……」

長兵衛、行こうとして——、振り向き何かを言いかける。

伊右衛門「……」

じっと俯き、虚空を見据える伊右衛門の表情に、長

兵衛、何も言わずして去っていく。

○廊下

薄暗い廊下を進んでいく長兵衛。

と——、微かに女の笑う声が聞こえた。

長兵衛「!？」

刀に手をかけ、さっと振り向く長兵衛。

背後の廊下には、誰の姿も、ない。

長兵衛「……」

小さく吐息を漏らし、再び前に向いて歩きだそうとすると——

長兵衛「！」

すぐ眼前に、逆さまになったお岩の顔があった。

長兵衛「つつつつつつつつ」

あまりの驚きに声すらも出ない。

逆さまのお岩の顔、ゆっくりと長兵衛の顔のすぐ前にまで近づいていく。

長兵衛「つつつつつつひつつんっ」

と——、長兵衛が肩に下げていた手拭いが、長兵衛の首を締める様に、長兵衛を吊り下げる。

長兵衛「あうつつつつくぐつつ」

首を吊られた長兵衛——、そのまま廊下の壁に背中を押しつけられ、中吊り状態で磔となる。

ぐっ、と両の手足が開かれ——、

ガン！ ガン！ ガン！ ガン！

手足が見えない釘によって打ち抜かれる。

首の腱が伸びきり——、ぐきっという大きな音を立て——、長兵衛は絶命する。

○仏間

僧侶たちは引き続き読経。

と、襖が開き、年老いた武士が入ってくる。

お熊「！源四郎殿」

源四郎「――せがれは」

お熊「――伊右衛門は、今門口の方におります」

源四郎「お熊。わしと離縁した後、吉良家に奉公したと聞いたが」

お熊「――左様でございます」

源四郎「わしが浅野内匠頭様に仕える身でありながら……」

お熊「（不貞ぶてしく）離縁した故、関係ございません」

源四郎「（苦笑）」

と――、入ってくる伊右衛門。

伊右衛門「！――親父殿……」

源四郎「伊右衛門、噂に聞いて来た。お前は本当にお岩を殺めたのか」

伊右衛門「――殺めたのは伊藤喜兵衛と、その孫娘、お梅でございます」

源四郎「して、その二人を殺めたのも――」

伊右衛門「それは！――それは、お岩の祟りによって――」

源四郎「（慟哭）――」

重い空気――。

僧侶達の読経だけが暫し聞こえ――

源四郎「――（俯き、伊右衛門と目を合わさず）伊右衛門。お前に勘当を申しつける」

お熊「！……」

伊右衛門「――承知いたしました……」

源四郎、よろよろとした足どりで部屋を出て行く。

暫し、僧侶の読経だけが流れている。

お熊「せがれや、あの老い先短い源四郎殿の事など構わずとも

良い――」

かりかり　ごそごそごそ――

異音にぎよっとなり振り向くお熊――。

お熊「……」

襖が、ほんの僅か開いている。

かりかりかり――ごそごそごそごそ――

お熊、そして伊右衛門、顔を引きつらせ、襖を見つめている。

ずず、ずずずずず——

襖が開いていく。しかし、誰も向こうに立ってはいない。

お熊「ひ……」

伊右衛門、気づく。襖を開けた者の正体——。開いた襖の隙間から、猫程の大きさの鼠が何匹も入ってくる。

伊右衛門「くそ！」

伊右衛門、鼠を踏みつけようとするも逃げられる。

お熊「(苦しげ/オフ) いえもん！」

振り向く伊右衛門——！

お熊の体に、無数の鼠が取り付き、全身に噛みついてる。

僧侶たち、驚怖し、読経を止めて逃げ出す。

伊右衛門「母上！」

手を差し伸ばそうとした伊右衛門、お熊の顔のすぐ下に取りついてる大きな鼠を見て硬直。

その鼠の顔、お岩の様に顔が崩れていた。

おぞましさに後退る伊右衛門。

お熊「ぎゃああああああっつつつつ」

顔が崩れた鼠に喉笛を食い千切られ、悶死するお熊。どうと床に倒れ込む。

伊右衛門「——(慄然) くっ」

伊右衛門、部屋から逃げ出す。

○仏間外

飛び出してきた伊右衛門、眼前にぶら下がるものを見て恐怖。

伊右衛門「——父上……」

それは、自ら縄で首縊りし、死んでいる源四郎の亡骸だった。

伊右衛門「南無……」

○廊下

外へ出ようと廊下を進む伊右衛門——、またも愕然。

伊右衛門「——長兵衛……」

壁の板に磔となっている秋山長兵衛。

伊右衛門「うっ、うああああああああああっ……！」

○庵室庭

裸足のまま、雪が降り積もる庭に飛び出て来る伊右衛門。

伊右衛門「——はあ、はあ、はあ——」

ざくっ、と雪を踏む音に振り向く伊右衛門。

伊右衛門「……」

さらしの鉢巻きにたすき掛けという、古風な仇討ち装束に身を固めた与茂七が、刀を抜いて伊右衛門の前に立つ。

伊右衛門「……な……」

与茂七「女房のお袖とその姉、お岩の父親、四谷左門の仇である貴様を、この佐藤与茂七が討ち取る」

伊右衛門に、最早まともな理解力は残っていない。しかし——、刀を構えて近づく者に対しては、相手をしようとする。

伊右衛門「いらぬ事を……。そこをどけ佐藤」

与茂七「伊右衛門、動くな！」

だっ、と声を上げ与茂七、伊右衛門に斬りかかる。

二度、三度と刀を交わす二人。

剣の道では、与茂七は伊右衛門の敵ではない。

必死に伊右衛門を仕留めようとするも、伊右衛門の力に押されていく。

与茂七「くくっ……」

与茂七を突き放す伊右衛門。

と！ 突如雪の下より鼠が湧き出て、伊右衛門に襲いかかる。

伊右衛門「くそっ！」

思わず刀を落としてしまう伊右衛門。

それを見逃さぬ与茂七——、

与茂七「だあああっ！」

伊右衛門の鬢辺りを斬りつける与茂七。

鬢が解ける伊右衛門。

伊右衛門「おのれ与茂七……」

とどめを刺そうと構える与茂七。

与茂七「——！」

鼠に食い破られていく伊右衛門の顔の肉。

立ったまま、肉塊に変容していく伊右衛門の末期。

与茂七「……」

雪の中に崩れる伊右衛門の軀。

しんしんの降りしきる雪——。

その光景——、舞台内の装置に変わって——

幕が引かれていく。

南北「(モノ)これが、文政八年に中村座で初演となった、『東海道四谷怪談』の幕切れであった。そう、最初に私が書いた台本では、伊右衛門の末期は描いているもの、お岩がこれによって成仏したのかどうかは、判らない」

溶暗

○歌舞伎絵モニタージュ

南北「(モノ)翌年の文政九年、上方大阪にて、『いろは仮名四谷怪談』と題名を変えられて、この物語が上演された。この芝居では、終幕にてお岩は成仏するという筋書きに変えられている」

○中村座前／文政八年

芝居小屋を前に佇む長身の男——南北。

南北「(モノ)そして——、文政十二年、私、四世鶴屋南北は死んだ、とされる。『東海道四谷怪談』の上演後、私、そして私の息子、娘婿を含め、芝居の関係者が十一名、たった五年ほどの間にこの世を去った——。

では、今こうして語っている私は誰か？ それについては、後ほど述べよう——」

無人の江戸の町に歩き去っていく南北の後ろ姿。

○歌舞伎小屋／舞台

仏壇返し、提灯くぐり等の仕掛けの写真、構造図。

南北「(モノ) 四谷怪談の芝居は、私の死後も上演する度に大入りとなった。しかし、役者や裏方に怪我をする者が多く、四谷にある於岩稲荷にお参りせねば崇られるという評判になった。仕掛けの多い芝居であり、その分、怪我人が出易いという事情もあっただろう」

○お岩の面

S 「怪談師 柳亭左楽が用いた面」

南北「(モノ) 『四谷怪談』は、芝居だけでなく、講談でも多く語られる様になった。七台目一龍斎貞山は、戦前より『四谷怪談』を講談に演じていたが、寄席の名前が書かれた提灯が風も無いのに落ちる等の怪事が続き、昭和四一年に悶死した。死の際には『お岩さま』とうわ言を言っていたという」

○四谷怪談映画スチル・モニタージュ

南北「(モノ) 映画の時代になり、『四谷怪談』は幾度も映画化されているが、昭和十三年、『怪談お岩役者』という映画がクランクインとなったその翌日、監督が急死。急遽監督が交代となった」

○映画スタジオ（実写／大泉撮影所ステージ）

二重の天井、土のステージ。

南北「（モノ）以降も、役者の顔が腫れたり、脚を怪我したりと、『四谷怪談』はそれを演じる側に何か祟りが及ぶというのが定説となっている——」

○渋谷の街／現代（実写）

眩く煌く光の奔流——。

無数に重なる猥雑な音——。

南北「（モノ）現代でもなお、その祟りは続いているのだろうか——」

渋谷の街——。

車のライト、ネオンサイン——。

怪談とは無縁そうな現代の人々——。

南北「（モノ）十年前、渋谷で上演された『四谷怪談』は大評判となったが、その制作者は上演中に飛び下り自殺をしている——」

猥雑な街の風景——。その中に、蜃気楼の様に佇む

南北の姿——。

南北「（モノ）私が狂言を書いてから一八〇年——、それだけの年月が経っても、今尚お岩の祟りは続いているというのだろうか……。」

私、四世鶴屋南北もまた、『四谷怪談』の祟りと共に、死んで尚、ずっと生き続けている」

南北の姿、ふっと消える。

○芥川龍之介宅

大正年間。邸宅の前に、長身の男のシルエット。

南北「（モノ）大正十二年、私は芥川龍之介という小説家の家

を訪ねた事がある」

○同／書斎

机には書きかけの原稿用紙。

「市村座の『四谷怪談』」という表題。

それを前に腕組をしている芥川（顔見せず）

と、女中が書斎に入ってくる。

芥川、女中に渡された名刺を見て慌てて玄関へ走る。

名刺には「鶴屋南北」と勘亭流で書かれていた。

○同／玄関

飛び出してきた芥川、辺りを見回すが、人の影はもう無い——。

○四谷稲荷／現代（実写）

高層ビルを背にひっそりと建つ小さな稲荷。

南北「（モノ）私が書いた『東海道四谷怪談』は、その時巷に流布していた幾つかの伝承噺を原型にしている事は、前にも述べた。疱瘡を患い、夫に裏切られて鬼女になり、災厄をもたらしたお岩——。貞女の鑑であったお岩——。他にも、お岩という名が登場する怨霊噺は存在していた」
——現代の風景から——、時間が退行していき——、

○四谷稲荷／文政年間（南北のいた時代）

江戸四谷左門町の、於岩稲荷。

そこに立っている南北。

南北「（モノ）『東海道四谷怪談』は、原型はあるとは言え、その物語も、お岩と伊右衛門という役柄も、私が作りあげた芝居の中の存在なのだ。

崇っているものがあるとすれば、実際にいたとされるお

岩では無いのではないか。これまでに起こった祟りは、全て、『四谷怪談』という物語を世に送ろうとする時に起こっているのだ——」

南北、稲荷に拝礼し、そこから立ち去っていく。

○江戸の町

雪が降り始める——。

南北「(モノ) 繰り返し繰り返し語られる『四谷怪談』の物語。それは、物語自体が語られる事を望んでいるのかもしれない——。更に言えば——、観客が望んでいるのだ。お岩の祟りが続く事を——。そう。文政八年に初演となつて以来、『東海道四谷怪談』は、単に狂言だけの存在、人が作った物語ではなく、祟りの本体となつて、虚構が現実を呪う祟りそのものとなっているのだ」

※この台詞後半から次シーンに被さっても良いです。

○蛇山庵室／庭

雪が降る庭園——。

伊右衛門末期の場が再び——。

二度、三度と刀を交わす伊右衛門と与茂七。

必死に伊右衛門を仕留めようとするも、伊右衛門の力に押されていく。

与茂七「くくくっ……」

与茂七を突き放す伊右衛門。

と！ 突如雪の下より鼠が湧き出て、伊右衛門に襲いかかる。

伊右衛門「くそっ！」

思わず刀を落としてしまう伊右衛門。

それを見逃さぬ与茂七——、

与茂七「だあああっ！」

伊右衛門の鬢辺りを斬りつける与茂七。

鬚が解ける伊右衛門。

伊右衛門「おのれ与茂七……」

とどめを刺そうと構える与茂七。

与茂七「——！」

鼠に食い破られていく伊右衛門の顔の肉。

立ったまま、肉塊に変容していく伊右衛門の末期。

与茂七「……」

雪の中に崩れる伊右衛門の軀。

与茂七「仇の伊右衛門、討ち取ったり二」

涙を流しつつ、よろよろと立ち去っていく与茂七。

伊右衛門の軀は鼠によって完全に形を留めない。

と——、雪を踏む音——。

ゆっくりとそこに歩いてくる長身の男——南北。

伊右衛門の軀の傍らに立ち——、見上げる。

南北「——お岩さん……、伊右衛門は成敗された……。これで

あなたの恨みは晴らせたのではないか」

淡い光が南北のやや上方に浮かび——、

美しいお岩の姿が浮かび始める。

南北「——（陶然と見つめる）」

だが——、お岩の表情は哀しみにある。

南北「——お岩さん——、すまなかつたよ。狂言の中とは言え、

あまりに過酷な運命をあなたに背負わせてしまった」

お岩——、初めて視線を南北に合わせた。

南北「人を崇めるのもうおよし。崇るなら、この南北に」

お岩の表情は、頷いたとも、拒否をしたともとれる。

見つめ合う、南北とお岩。

が——、

お岩の顔——、みるみると崩れ、おぞましい形相に

なって——

暗転

南北「(モノ) もう一度言おう——。『四谷怪談』の物語は、その観客自身が崇る事を望んでいるのだと——。そして、今、あなたはこの物語の全てを見たのだ——」

完